

が、このうち一四軒は平面プランが円形住居であり、他は方形に近いものと不明確なものとそれぞれ五軒となっている。地表を円形に掘りくぼめて掘立柱を立て草葺きにした竪穴式住居で、中心に炉を設けた縄文時代の一般的な住居である。しかし、他の遺跡を含めて当時どのような集落が形成されていたのかこの地方についてはまだ解明できる段階ではない。(第22表・第89図参照)

三 犀川町周辺の主な縄文時代遺跡

(一) 節丸西遺跡(豊津町節丸)

一 被川中流域左岸の高さ約三メートルの低い河岸段丘上に位置する。圃場整備に伴う事前調査で発見され、平成元年度に発掘調査が行われた。発掘された遺構は、住居跡二四軒、土壇、埋甕であるが、柱穴からすれば住居跡の数はまだ増えるものと考えられている。

住居跡のうち円形プランのもの一四軒、方形に近いもの・不明確なもの一〇軒であったが、そのうち地床炉のみをもつもの七軒、石組炉と地床炉をもつもの一軒、土器炉をもつもの一軒、石組炉のみをもつもの二軒である。出土遺跡は土器・石器類が中心であるが、土器型式は鐘崎式・北久根山式・西平式があり、縄文時代の後期後半の時期が考えられている。(第15・16図参照)(豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」一九九〇)

(二) 浄土院遺跡(荊田町浄土院)

高城山南麓に見られる扇状地状地形の先端部低地に位置する。南方約

七〇メートルのところには小波瀬川が流れて周防灘に注ぐ。昭和三十一年(一九五六)の緊急調査の際には、水田下約五〇メートルのところから縄文時代後期の方形竪穴式の敷石住居跡と考えられるものを確認したほか鐘崎式・西平式土器などが出土している。

次に昭和四十七年の緊急調査では、鐘崎式・西平式土器のほか磨製石斧・打製石斧・石鏃・敲石・石皿・スクレイパー・石包丁形石器などが出土している。また西平式土器の甕棺(口径三八センチ・器高三八センチ)が出土し、中に成人女性の火葬骨が残っていた。遺跡は縄文時代後期中葉から後半に及ぶもので、石器類の組み合わせから縄文農耕論に有利な資料を加えることになったとされる。また「縄文人骨の火葬例は数少ない葬例で、洗骨葬とともに改葬の新事例として注目される」と調査者は述べている。(第17図参照)(浄土院遺跡調査団「浄土院遺跡調査概報」一九七二)

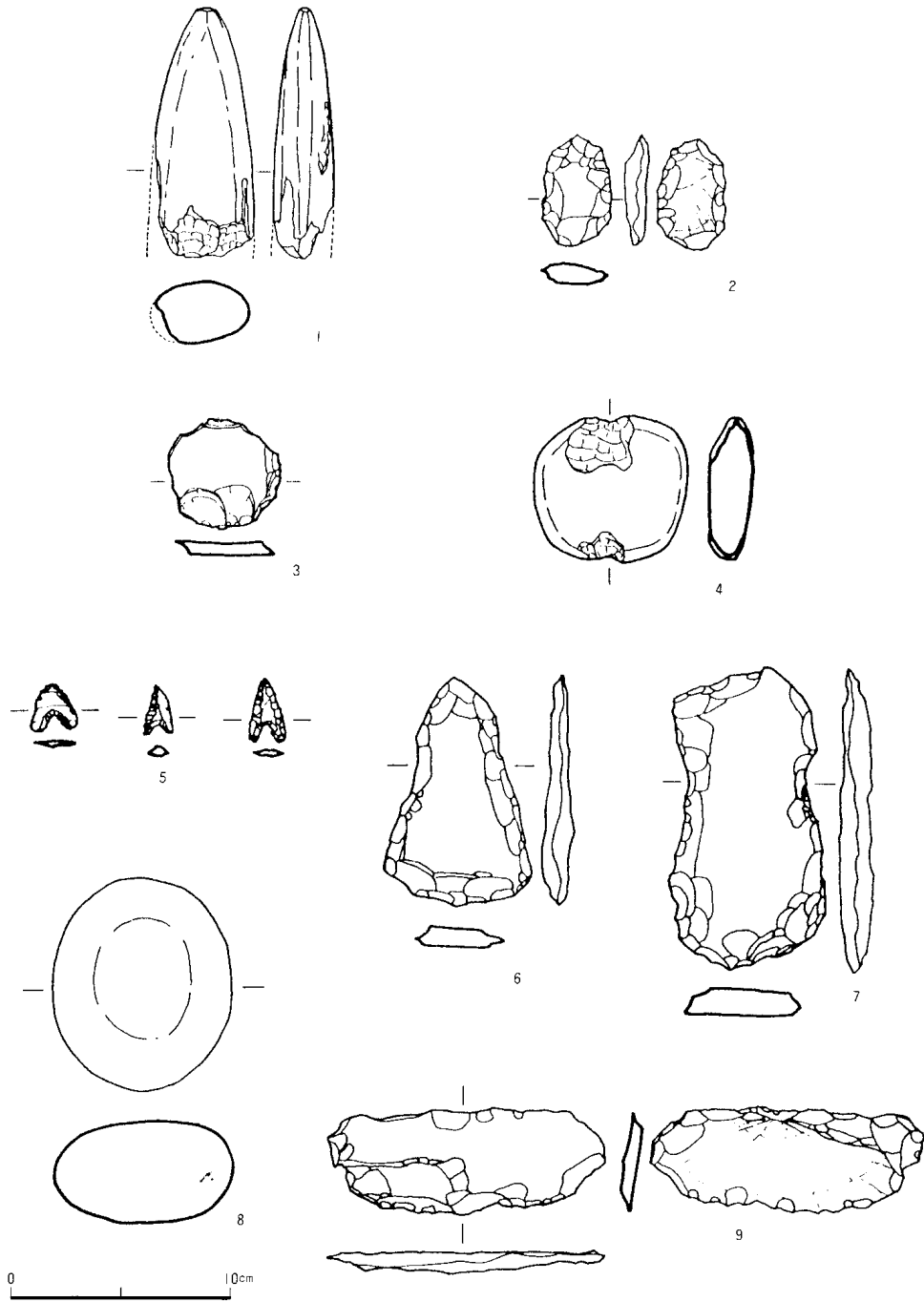
(三) 川ノ上遺跡(豊津町徳永)

一 被川の右岸で標高約三〇メートルの河岸段丘の辺縁部に位置する。国道十号椎田バイパスの建設に先立ち昭和六十四年(一九八九)から発掘調査が行われ、弥生時代の遺跡を中心に縄文時代・古墳時代・歴史時代の遺跡が出土した。このうち縄文時代の遺物は打製石斧・打製石鏃などがあるが、詳しい遺物の考察は今後報告書の中でなされよう。

(四) 黒田(種生)遺跡(勝山町上黒田)

一 勝山平野の南西部で、旧長峽川の河道と考えられる帯状の低地辺縁部に位置する。低湿水田の排水施設の工事中に、水田下約一・二メートルで発見

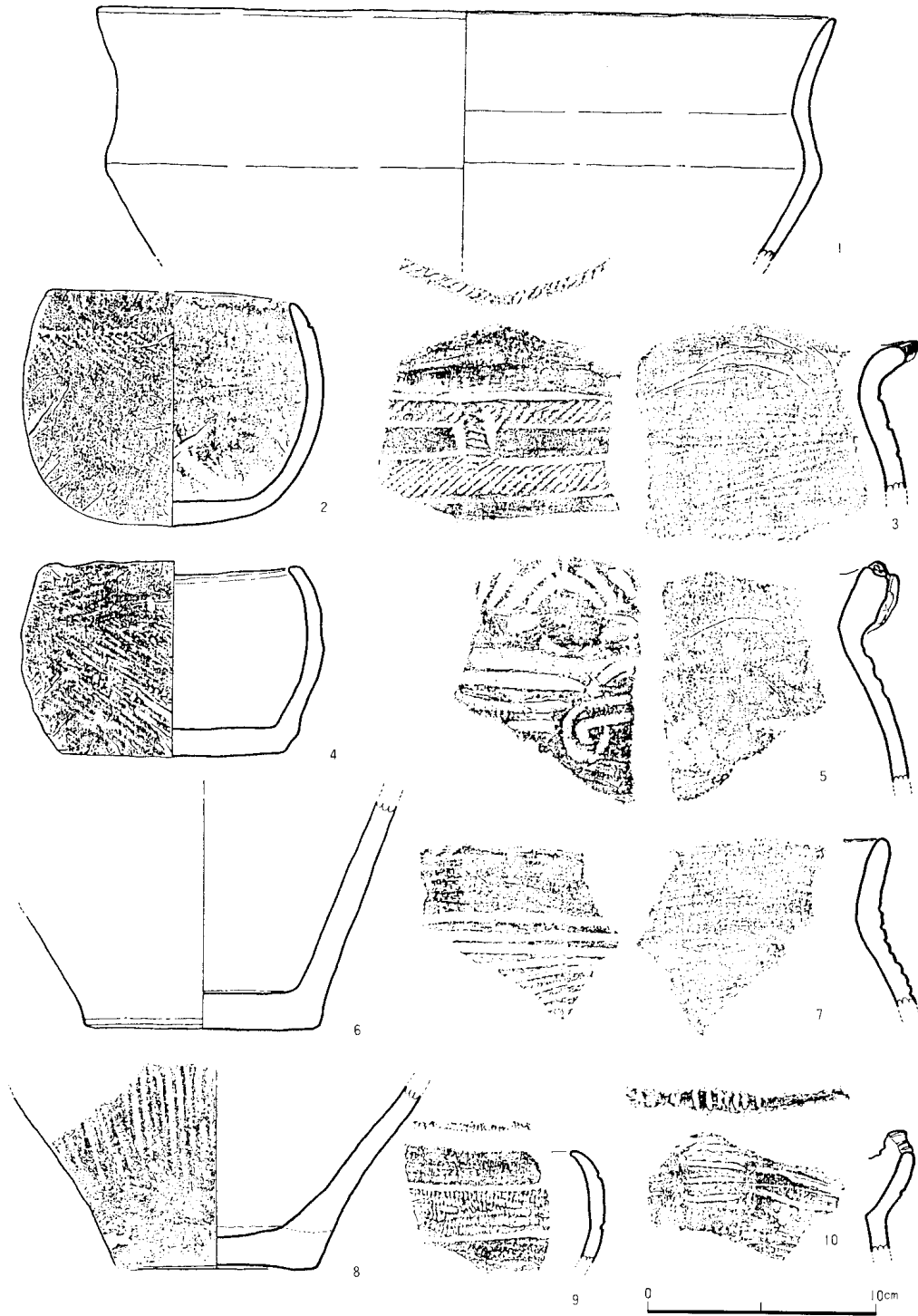
第15図 節丸西遺跡5号住居跡出土石器



1 磨製石斧（蛇紋岩）2 スクレイパー（サヌカイト）3 円盤状石製品（緑泥片岩）4 石錘（安山岩）5 石鏃（黒曜石）6、7 扁平打製石斧（緑泥片石）8 磨石（安山岩）9 横刃形石器（緑泥片岩）

（豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」1990より）

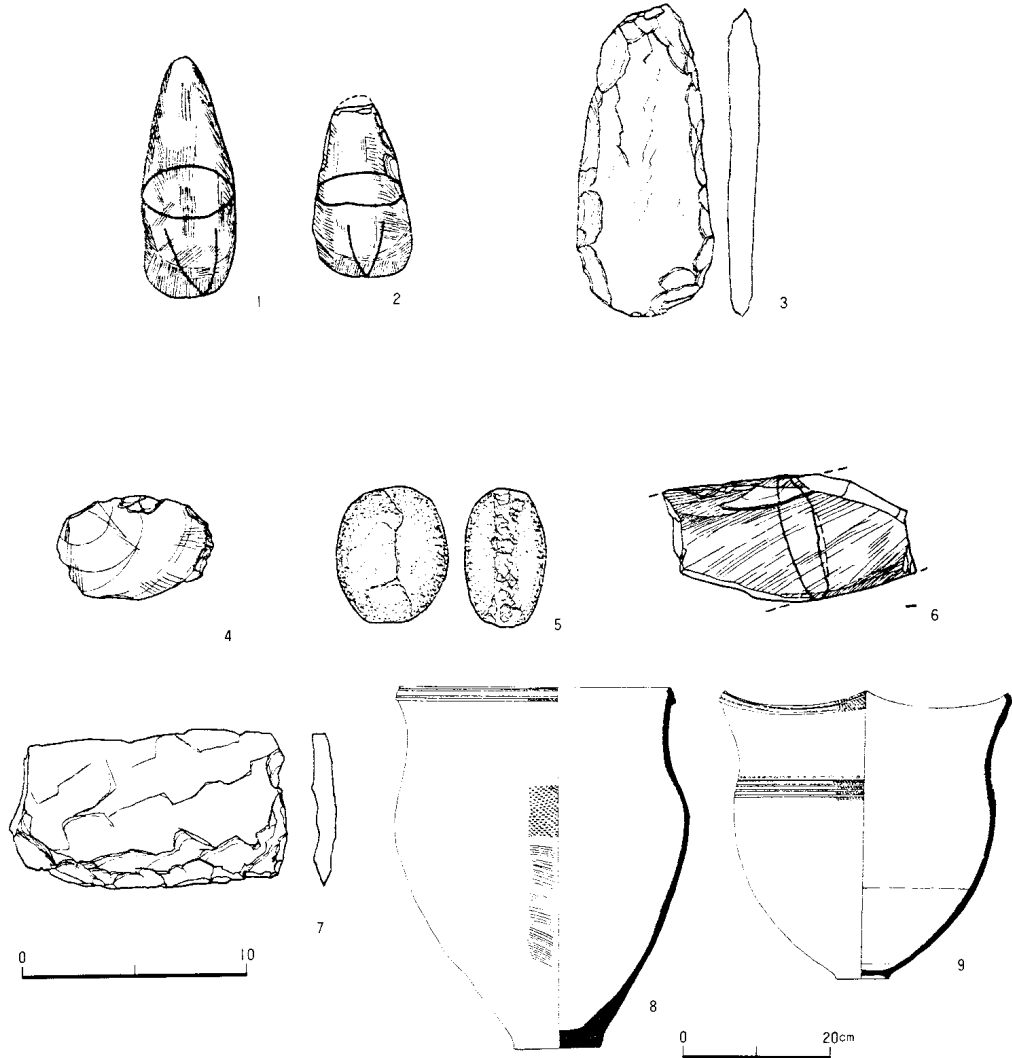
第16図 節丸西遺跡5号住居跡出土土器実測図



1 鉢 2、4 浅鉢形土器 3、5、6、7、8 深鉢片 9、10 鉢形土器片

(豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」1990より)

第17図 浄土院遺跡出土石器・土器



- 1、2 磨製石斧 3 扁平打製石斧（花崗閃緑岩） 4 スクレイパー（頁岩） 5 敲石（花崗岩）
6 砥石（蛇紋岩） 7 石包丁形石器（花崗閃緑岩） 8 土器（調査前の発見品）
9 甕棺（西平式）

（浄土院遺跡調査団「浄土院遺跡調査概報」1972より）

された低地遺跡である。流木らしい材木が多く見られたといわれているが明確な住居跡は確認されていない。

出土品には、鐘崎式・西平式・三万田式・御領式の各型式の土器片のほか石鏃・石皿・摺石・敲石・石匙などの石器類のほか扁平打製石斧一本も出土し、ドングリの貯蔵穴も見られた。縄文時代後期の遺跡である。(写真2参照)

(五) 小豆田遺跡 (行橋市下柳田)

井尻川の護岸工事中に川底の約一坪下の堆積層から縄文時代中期の土器が出土した。また鐘崎式・西平式の土器片も出土しているので、縄文時代中期から後期にかけての遺跡と思われる。

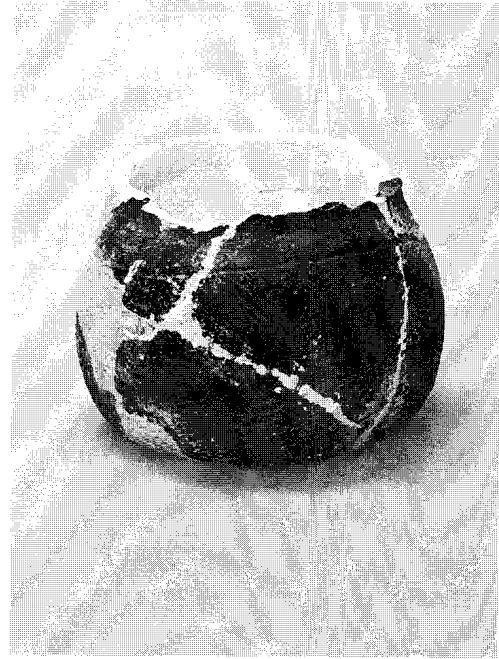


写真2 黒田(種生)遺跡出土土器
(行橋市教育委員会提供)

四 犀川町の縄文時代

犀川町域ではごく最近まで縄文時代の遺跡は発見されていなかったが、平成二年(一九九〇)になって圃場整備事業に先立つ発掘調査によって出土し始めた。

現在まで発見された遺跡としては、自在丸遺跡・タカデ遺跡・寺門遺跡・五反田遺跡・清四郎遺跡がある。いずれも遺跡としては残存状態が悪く、遺物も少ないために縄文人の生活の具体的な復元ができるものではないが、しかし自在丸遺跡と寺門遺跡からは縄文時代の早期に位置づけられる押型文土器が出土しており、同じ時期の土器を出土している吉木遺跡(豊前市)・松丸遺跡(築城町)とともに豊前地方の縄文時代を考えていくうえからも貴重な遺跡である。また、タカデ遺跡や五反田遺跡・清四郎遺跡からは条痕調整の土器片が出土しており、縄文時代晚期に位置づけられている。(第3・4表参照)

これらの遺跡はともに河岸段丘上や川に近い丘陵先端部に位置しているが、内陸部における縄文人の居住環境を考えていくうえからも、またこの地方の先土器(旧石器)時代から縄文時代に引き続くこの地方の人々の営みを解き明かすうえからも貴重な遺跡となっている。

採集や狩猟を中心としたこの時代に、恐らく家族を中心に血縁で結ばれた小集団の人々が谷ごとと今川や祓川などの河川に沿って点々と小集落を形成し生活を営んでいたことが想像されるが、今後縄文時代中期の遺跡も発見されていくことであろうし、そうすればさらにこの時代の姿が具体的に明らかにされていくものと思われる。